

助成年度：平成 26 年度

〔所属〕 兵庫県立人と自然の博物館

〔役職〕 研究員

〔氏名〕 上田 萌子

〔課題〕

温暖帯の砂浜海岸における地域本来の成帯構造からみたクロマツ林に代わる海岸林の解明

〔内容〕

海浜では、一般的に海側から内陸側にかけて、一年草群落・多年草群落・矮性低木群落・低木群落・亜高木群落・高木群落の順に植物群落が配列する成帯構造がある。温暖帯の海浜では、一般的に矮性低木群落の位置にハマゴウ群落、低木～高木群落の位置にクロマツ林がある。このクロマツ林は多くが人工林であり、成帯構造におけるクロマツ林の位置には、本来別の植物群落が占めていたと考えられる。日本各地の海岸には、古来よりクロマツの人工林が造成されてきたが、管理コストや松枯れの問題から、クロマツ林以外のより安定的に存続できる広葉樹による海岸林の形成が期待されている。海浜の成帯構造では、亜高木～高木群落の位置の自然植生としてタブノキ等が優占する群集が知られているが、低木群落については十分に把握されていない。そこで本研究では、温暖帯の自然海浜に残存する低木群落を調査し、クロマツ林分布域の自然林を明らかにすることを目的とした。

自然海浜を扱った調査報告等から海浜に分布の記録がある低木群落を参照し、最も分布数の多かったウバメガシ群落に着目した。伊豆半島から種子島に至る 11 地域の海浜を対象地に設定し、ウバメガシ群落のよく発達した典型的な植分を対象として、植生調査を実施した。一方、ウバメガシ群落は、一般的に海崖の風衝低木林の一つであるウバメガシトベラ群集としてまとめられていることから、海浜のウバメガシ群落と海崖のウバメガシ群落の種組成を比較し、差を確認した。

その結果、ウバメガシを優占種とし、トベラ群団の種が生育する群落を確認した。また、海浜で確認したウバメガシ群落は、海崖のウバメガシ群落と種組成が類似していることがわかった。したがって、今回海浜で確認した群落は、ウバメガシトベラ群集に位置づけられると考えられる。以上より、伊豆半島から種子島にかけての海浜では、ウバメガシトベラ群集がクロマツ林分布域の自然林の一つであることが示唆された。したがって、温暖帯地域の海浜における今後の造林樹種として、クロマツ以外にウバメガシをはじめとするウバメガシトベラ群集の構成種の利用も検討できると考えられる。